

萬葉・古今語雜考

木下正俊

初めに

万葉から古今へ、というテーマは、前者から後者へどんな風に変ったか、そしてそれにはどのような要因が介在したと考えられるか、などについて、文学史的に、また作風や表現法・用語の違い・音調などの、いろいろな角度から解明が試みられている。

ということは、実際には時・空を隔てて歌が作られたまた編まれて成った、筋交いとも言うべき関係の二集であるのかかわらず、さまざまな点でお共通する所が多いと思われるため、相互の比較が可能なのである。もちろん、万葉集にしかないもの、古今集だけに見られる特色も少なくないが、その類いの共通面や相違点について語ることは私は不向きであり、また興味の中心もそこにある。

これから取り上げようとするのは、両集に連続して見られながら、次第に衰微したり拡充したりしてゆく、ごく一部の問題について、

あるいは語彙あるいは語法に関する些かの覚書を基にして、書き残そうと思うものである。

例えば、一般に万葉集では二恋フといい、古今以後はヲ恋フに変わると言われる。しかし、私の計算では万葉にもヲ恋フが五例（重出歌の「風をだに恋ふるは羨し」を一つと数えて）あり、古今にも二恋フが二例あって、この問題はしなく簡単に割り切れない。

また、副詞カツは本来、「入りてかつ寝む この戸開かせ」（万・三三三〇）などのように、不十分ながら一往、取り敢えず、の意で用いられていたが、古今では「山の錦の 織ればかつ散る」（二九一）などと、一方では、の意に変わった、と言われる。ところが、中には「かつ見る人に恋ひや渡らむ」（六七七）のような、不十分に、の意に用いた例も混じっている。

これや先の二恋フ→ヲ恋フの推移の問題は、私にとって興味深い、これらは、動詞恋フや副詞カツがこれら二集の間で意味が変わ

たことに原因があるにしても、意味の変化は把握が困難なため、ここでは触れなかった。即ち、形の上にはつきりと推移が見られる場合に限って取り上げたことをお断りしておきたい。

また、「古今語」という耳馴れない語を用いたことも、あくまで便宜を優先させた当座の使用と、お許しいただきたい。

一 「あさなけに」 其他

あさなけに見べき君とし頼まねば思ひ立ちぬる草枕なり（古・三七六龍）

この第二句の「見べき」は、「花とや見らむ」（古・六）などの見ラムと共に、万葉集にも見られる古風の語法によっている。ただし、万葉では見ルの一語だけでなく、上一段活用動詞であればすべてベシ・ラム・ラシ・トモ（逆接続助詞）に、その連用形から接するらしく、例外がないようである。その点、古今集ではごく少数例しか見られないようで、全体としては、

散る間をだにも見るべきものを（古・七九）

雪見るべくもあらぬわが身は（古・三八三貫之）

過ぎがてにのみ人の見るらむ（古・一二〇躬恒）

よどむと人は見るらめど（古・七二一よみ人しらず）

などの終止形接続の方が一般的である。このことは、古語使用が趣

味の一部の歌人が、古体を故意に使用したものか、はたまた日常一般に両形が並行して使用されていたものがたまたま音数の制約によって偶然に現れたものか、私には分からない。ただあるいは、万葉語が古今集の歌語に混じって結構生きていたらしい、という事実が看取できるだけである。

しかし、目下の私の関心はそれら「見べき」の類の摘出になく、第一句の「朝なけに」の方に在る。これを釈して、古今集の注釈書が、万葉集の「朝に日^ひに」の訛りである、とするのは、誤りではないまでも、説明不足のように思われる。

いかにも、これが万葉集の、

青山の嶺の白雲朝尔食尔恒に見れどもめづらしあが君（万・三七七）

いかならむ日の時にかも吾妹子が裳引きの容儀朝尔食尔見む（万・二八九七）

かくばかり恋ひつつあらずは朝尔日尔妹が踏むらむ地にあらましを（万・二六九三）

などのアサニケニから来たものであることは疑いない。因に言えば、最後の「朝尔日尔」は、新訓万葉集がそう読み始めるまでは、アサニヒニと読まれていたものである。これらのケは、古典大系本万葉集の頭注に、

日（ヒ）の複数名詞。三日四日などのカの転。

とするそれで、「朝に」と並べ用いたケニは、昼間、を意味すると考えられ、「気」・「食」などの仮名の使用から、そのケは特殊仮名遣で乙類とされるものであることが分かる。

それは良いが、「朝に」という語続きには疑問があると思われる。なんとなれば、時間を表す名詞の大半には格助詞ニが付きにくい、という特徴がある。具体的に言えば、アシタ・ユフへにはニが付いても、アサ・ユフにはニが付かない。例えば、

朝尔往属の鳴く音は吾が如く物念へかも声の悲しき（万・二一

三七）

の「朝」は旧訓以来アサと読むことを避けて、ツトと読まれている。

それを考慮してか、万葉集総索引が「朝にけに」を連語扱いにしてそれ以上に分解しないのは、一見識ある措置と言つてよい。前の「青山の嶺の白雲」（三七七）の「朝にけに」について仙覚抄が、

朝尔食尔トイフ、ケニハマサリテトイフコトバ也

と注するのは、けだしそのケニを、

しくしくに吾は恋増さる月二日ニ異ニ（万・六九八）

月ニ異ニ日々雖見 今のみに飽き足らめやも（万・九三二）

の、格段に、ますます、の意の「異に」と混同した解釈である。言うまでもなく、「異」のケは甲類のそれであり、万葉語としてはこ

れら二つのケニを区別すべきである。

かくて、「朝にけに」は、朝のうちも日中も、の意と考えられるが、それでも「朝に」の語続きには釈然としないものが残る。古今集の「あさなけに」の歌の作者「麗」（女性）は、どのような経路で「朝にけに」あるいは「朝なけに」という語を知り、またどのような意に解して自作歌に詠み込んだのであろうか。後世の注の代表として『八雲御抄』を挙げるならば、

あさなけ あけくれと云心也

とあり、それは歌意にはよく合うが、いかなる根拠あつての注か分からない。それに比べて、顕昭の『古今集注』が、

アサナケニトハ、アサユフニト云心ヲ略シテイヘリ。朝ヲバア

サケトモ云、又アサナトモイフ。コトバヲトリアハセテアサナ

ケトハ云也。フルクハ「アサニヒニ」トモヨメリ。又アサニケ

ニトモヨメリ

というのはさすがに博識と言ふべく、そのケを清音としているのも変つてゐる。というわけは、声点の付された他の写本十種ばかりあるその全てが「け」に上声の濁音符を付している。これによれば、一般に「アサナケニ」と読まれていたらしいことが知られるが、いかなる理由によつて濁音に唱えられたかは疑問である。顕昭が「アサナトモイフ」というのは、

鶯の鳴く声はあさなあさな聞く(古・一六)

あさなあさなわが面影にはづる身なれば(古・六八一)

などの、重複形で現れるそれをさすのであろうか。それとも、

伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもが

な(古・六八三よみ人しらず)

のアサナをも同類と見るのであろうか。もし前者ならば重複してのみ現れるアサナアサナを繰り返さずに用いた場合いかなる意味をなすか、明らかでない。後者であつてもまた従うことができない。言うまでもないことながら、この歌の上三句は万葉集の

伊勢の白水郎の朝魚夕葉に潜くといふ鰈の貝の片念ひにして

(二七九八)

と同じで、類想と言つてもよい。

ところが、二首ともこの「あさなゆふな」について、毎朝夕、副食物、の両説が行われている。万葉集の「朝魚夕葉」を、副食物、と解するのは略解所引の宣長説と日本古典文学全集本(三種共)とであり、代匠記(初稿本)は両説を並記している。古今集の「朝な夕な」を、副食物、とするのは、同じ宣長の古今集遠鏡と金子元臣の評釈であり、二首共に圧倒的に、「毎朝夕」説を唱える者が多い。

ここで無視できないのは、アサナ(ア)サナおよび、「秋の」という連体修飾語があるため多少疑わしきがあるが、

かりがねの鳴きこそ渡れ秋のよなよな(古・二二三)

のヨナヨナの語の存在である。そしてこれらアサナ(ア)サナ・ヨナヨナがそのままの形で連用修飾格に立つことに注目する必要がある。これらのナの働きについては知る所がない。あるいは多少関係があるか、と思われるものに、万葉集東歌の、

何故といへかさ寝に逢はなくに真日暮れて与比奈は来な^こに明けぬ時^{とき}来る(三四六一)

のヨヒナがあるが、ヨヒニの転か、とする説もあつて、保留するのが無難であらう。

確かなことは、万葉・古今のアサナユフナは助詞ニを伴つており、二なしで時格になるアサナ(ア)サナやヨナヨナとは無関係だということである。やはり宣長らの言うようにアサナユフナは副食物を意味し、ニは、として、の意、資格を表す助詞であらう。「朝魚夕葉」は正訓表記であり、真淵の『万葉考』がいうような、単なる「ふでのすさみ」ではなからう。

なるほど、万葉集には借訓という用字法があり、そのプロミネントな場合として戯書なる文字遊戲が存する。だから、といつてこの「朝魚夕葉」をさえ借訓ないし戯書と見るならば、その人こそ奇を衒う行き過ぎた理解に傾いていると言ふべきではなからうか。

あるいはまた、人あつて、アサナアサナニ・ヨナヨナニとある例

を示すかも知れない。

賤の男の朝な朝なに樵り集むるしばしのほどもあり難の世や

(新古今・一八三七山田法師)

風寒み木の葉暗れゆく夜な夜なりに残る隈なき庭の月かけ(新古

今・六〇五式子内親王)

更には、アサナユフナがニを伴って、副食物として、の意でなく、時間の格に用いた例がある、とて示されるかも知れない。

深山木を朝な夕なに樵り集めて寒さを恋ふる小野の炭焼(拾遺・

一一四四曾根好忠)

別るべき後の嘆きを思はずは待たれましやは朝な夕なに(浜松

中納言物語)

しかし、古語の解釈に際して、徴すべき同時代の証拠がないからと言って、下れる世の用例を引くことは原則的に許されない。仙覚もその抄の中に何度か、

古集ニムカヒテ古語ヲソムクベカラズ(一一三一の注)

古語ヲバソムキテイマコトバニ点ジナスコト又不得心ナリ。イ

ツレモソノトキノコトバニシタガフベキ也(一一五〇七の注)

と警告している。

いささか本旨から逸れたが、古今集の「朝なけに」は、特殊仮名遣の対立が消滅し、ケの甲乙の分ちもなくなった後に、「朝に日」

のケニが、「日に異に」などの「異に」と区別がなくなつて生れた語でないか。

ついでに言えば、その「日に異に」も、万葉集の中で一部既に訛つて歌われていたようである。巻第十六の終り近く、乞食者が歌う

「蟹の歌」(三八八六)の中に、

あしひきの この片山の もむ楡を 五百枝剥き垂れ 天照る

や 日の異に干し…

という箇所がある。歌われているうちに、なんとなく意味さえ分かればそれでいい、というような語法無視の形が出現したのであろう。

二 「ゆたのたゆたに」

右の「朝なけに」とは語構成の上で直接結び付かないが、似たような二次的音転と考えられるものに、

いで我を人などがめそ大船のゆたのたゆたにもの思ふころぞ

(古・五〇八)

の第四句「ゆたのたゆたに」というのがある。これについて、「奥義抄」は、

ゆたのたゆたとは浪にうきてとかくゆるぐ也

と注し、童蒙抄や袖中抄・和歌色葉・八雲御抄などの注もおおむねそれに近い。この語は、それらの旧注も引くように、万葉集の

吾情湯谷絶谷浮尊^{よるま}辺にも沖にも寄りかつましじ（一三五二）

の第二句「ゆたにたゆたに」から出たものであろう。そしてユタニがユタノとなつたのは、タユタをユタに接頭語のタが付いたものと解し、それらを結ぶ助詞ノは同格を示す、というような理解が行われていたからに違いなく、今日の古今集の注釈書までが例外なくその解釈に従っている。

しかし、万葉集の注釈書は万葉歌の「ゆたにたゆたに」について、ユタニとタユタニとが別語であることを知っており、古今集の「ゆたのたゆたに」を遡らせたような解釈をするものは金子元臣の評釈と全註釈・大系本ぐらいである。このように万葉集の諸注の大半がユタニとタユタニとを混同しないわけは、ユタがこれ以外にも、

…大船の由多^{ユタ}ルあるらむ人の児故に（二三六七）

…その夜は由多^{ユタ}ルあらましものを（二八六七）

安齊可渴潮干の由多^{ユタ}ル思へらば（三五〇三）

などとあり、ゆったりと落ちて着いている状態を表す語であり、タユタニとは語形が似ていても意味は真反対だ、ということが知られているからである。タユタニはむしろ、絶えず動いて静止することがないさまを表し、動詞タユタフと同源である。

それが古今集に見るように、「大船のゆたのたゆたに」と続けられるのは、歌われていくうちに、万葉集の歌の「尊（じゅんさい）」

の浮き葉が静止してばかりいず、浪に揺られてゆらゆら動く、という本来の意味用法が忘れられ、大まかな理解が一般的になってしまったのであろう。

このように、万葉から古今に移るときに音転した例に「うらびれ」（古・二二六）や「（すすき）おしなみ」（古・三一八）などがある。これらは万葉集では「宇良夫礼（浦経・浦触・裏触）」、「（須々吉）於之奈倍・（浅茅）押靡」のように書かれている。少し事情が違うかも知れないが、

老いらくの来むといふなる道まがふがに（古・三四九業平）

渡り河水まさりなばかへり来るがに（古・八二九小野篁）

など、動詞の連体形を受けて、目的や目安、ないし希望する内容を表すガニについても似たような事情を考えることができる。これら古今集のガニは、一見万葉集の

秋田刈る飯廬も未だ壊たねば雁が音寒し箱も置きぬがに（一五

五六）

慨きや醜ほととぎす今こそば声の漚るがに来鳴きとよめめ（一

九五二）

などの、いせんばかりに、の意のそのの延長線上に在るかのように見えるが、これら万葉のガニは活用語の終止形を受けている点で一視することができない。

の
むしろ、古今集のガニの類例を万葉集に求めるならば、その東歌

おもしろき野をばな焼きそ古草に新草混じり於非波於布流我尔

(二四五)

がそれで、中央語では

梅花よしこのころはかくても有金(万・三二九)

音のみも名のみも聞きて登母之夫流我爾(万・四〇〇)

などのようにガネという形で現れる。多少の危険を顧みずに言えば、このガニについて、万葉集の東歌(東国語)と古今語と一致する事実は、単なる偶然とばかり言い切れないかも知れない。

と言うのは、反語の文末メヤモの類が、東歌・防人歌でメカモという形でも見えることと、もしかすると関係があるのでないか。例えば、

許曾の里人阿良波左米可母(万・三五五九)

筑波の山を恋ひず安良米可毛(万・四三七二)

由なしに許求良米可母与(万・三四三〇)

など、メカモの類が万葉では東国語に限って現れるが、古今にも一部に見える。

山科のおとはの山の音にだに人のしるべくわが恋ひめかも(六
六四よみ人しらず)

あるいはそれに倣って意識的に用いたと見ることもできる、仮名序の末尾

古をあふぎて今をこひざらめかも

もこの列に加えてよいかとも思われる。

三 口誦による訛伝形か

万葉集に最初に加点了したのは、古今集に次ぐ勅撰の、後撰集の撰者でもあった源順らのいわゆる梨壺の五人、ということになっている。しかし、古今集春下の紀貫之の歌に、

三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ(九四)

というのがあり、それは諸家も指摘する如く、額田王の作、

三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや(万・

一八)

の本歌取に違いない。その貫之の書いた古今の仮名序に、この古今集には「万葉集に入らぬ古き歌」と貫之らを含めた「今の代」の歌とを収めた、とある。この言い立てに注目すれば、少なくとも貫之らの一部の撰者たちには、撰集の候補に積み上げられた歌々を見て、万葉の中にあるか否かが識別できるくらいに、万葉集の歌のかなりの分量を諳んじていたことが知られ、時にはその一部を自作の中に借用することもあったのでないか。

古今序にそのように書かれていても、実際には万葉集のと重なる歌が数首あることは知られており、私の見る所では次の五首がそれである。

〈古〉さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月わたる

見ゆ（一九二）

〈万〉さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞こゆる空を月渡る見

ゆ（二七〇）

〈古〉月草に衣はすらむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも

（二四七）

〈万〉月草に衣はすらむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも

（二五二）

〈古〉奥山の昔の葉しのぎ降る雪の消ぬとか言はむ恋のしげき

に（五五一）

〈万〉高山の昔の葉しのぎ零る雪の消ぬとか言はも恋の繁けく

（一六五）

〈古〉しはつ山うちいでて見ればかさゆひの嶋こぎかくるたな

なし小舟（一〇七三）

〈万〉四極山打ち越え見れば笠縫の嶋こぎ隠る棚無し小舟（三

七二）

〈古〉ささのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに

見む（二〇八〇）

〈万〉左檜隈檜隈川に馬駐め馬に水かへ吾よそに見む（三〇九

七）

あるいはこれに次の一对を加えるべきか。

〈古〉たえず行くあすかの河のよどみなば心あるとや人の思は

む（七二〇）

〈万〉絶えず行く明日香の川のよどめらば故しもある如人の見

まくに（一三七九）

更には墨滅歌の四対がある。煩を避けて歌詞の下半は省略する。

〈古〉一一〇七〳〈万〉二二八三（吾妹兒に相坂山の）

〈古〉一一〇八〳〈万〉二七一〇（犬上のとこの山なる）

〈古〉一一一九〳〈万〉一一四〇（しなが鳥猪名野を行けば）

〈古〉一一二三〳〈万〉七七六（言出しは誰ならなく）

小異歌の類は除外した。

仮名序の言い立てと裏腹に、かくも多数の万葉歌が古今集に含まれていることについて、一般には、万葉集から直接に引いたのではなく、万葉集の一部の歌が伝誦されて広まり、「よみ人しらず」として採録されたのだ、とか、民謡の類がたまたま文字と逢着して万葉と古今とに分れて収められたのではないか、などと想像されている。私は、その他にかなりの数の歌が既に解説されていたのでないか、

と別案を提出したが、大半はやはり、本来万葉集にあったというこ
とも気付かれないまま口誦され、民謡化していたと考えてよからう。

その証拠というにはあまりに数少なく、自信がないが、先に指摘
した「あさなけに」や「ゆたのたゆたに」のような訛音の混じった
歌が古今集にあることに注目したい。唱い物の中の歌詞というもの
は、唱われているうちに原作者の意図と関係なく、意味も分からな
いままに伝播し、時には所々聞き違えられたり、意識的に取り換え
られたりして変化するのが常である。万葉集の東歌の中にかなり難
解なものがある一因も、そこにあるのではないか。

四 主格助詞ノ・ガの問題

以上見來つたものは、主として語彙の関係、それも形に現れた面
での異同を中心として述べたが、以下は文法に関する移り変りを、
かいつまんで記そう。

佐伯梅友博士は、論文「萬葉集の助詞二種」(『萬葉語研究』所収)
で、文の主格を示す助詞ノ・ガの現れ方の狭さを明快に説かれた。
その成功の因は扱われた対象が上代語、それも万葉集の例が中心で
あったことであろう。しかし、それでも割り切れなかった剰余とし
ての「例外及び例外と見えるもの」を幾つか示された。その一つに、
鳥廻には 木末花咲き ここばくも 見乃さやけきか(三九九

(一)

がある。私は初め対象語格の故か、と思った。博士の例示されたも
のの一つに「聞き能悲し^{||}も」(四〇八九)というのがあるからであ
る。しかし今は、感嘆文だからだ、と思つてゐる。この他に、

わが縷さ百合の花能笑まはしきかも(四〇八六)

帰きの 別れ之^{||} あまた 惜しきものかも(三二九二)

がある。尤も、カ・カモで終わる感嘆文の全てがノ・ガをとるとは
限らない。

野辺行く道者こきだくも繁く荒れたるか(二三二)

海若者 露しきものか(三八八)

静けくも岸には波者寄せけるか(二二二八)

などのように、ハが現れる形の方が多い。

ところが、古今集では、

河風の涼しくもあるか(一七〇)

今朝鳴く声のめづらしきかな(二〇六)

行く歳の惜しくもあるかな(三四二)

秋はぎの移りも行くか(七八二)

厭かなくにまだきも月の隠るるか(八八四)

これらの他にもう五例あるが、古今集ではこの種の感嘆文はすべて
格助詞ノをとる。何故このように変つたのか、理由を知らない。た

だ、万葉からその傾向が始まっていることだけは確かである。

「例外及び例外と見えるもの」のもう一つの場合として反語表現があり、佐伯博士は、

情なく 雲乃 隠さふべしや (一七)

を挙げられたが、次の二つもそれに加えることができる。

行く舟の過ぎて来べしや (一九九八)

人之遠名を立つべきものか (二七二二)

ベキモノカはベシヤの音数による変形である。

古今集にはこのベシヤの類はないが、メヤハ・メカモの類で終る反語表現にはガが現れることがある。先にも挙げた「音にだに人の知るべくわが恋ひめかも」(六六四) およびその類歌一一〇九の外に、

み吉野の大河の辺の藤浪のなみにおもはばわが恋ひめやは (六九九)

がある。ただし、それは主格がワ(我)で動詞が恋フである場合に限るようで、それ以外では「われ劣らめや」(五八二)「われ忘れめや」(七三三)のように、標準的な形になる。これについてもいかなる故か、私には答えられない。ただこの古今のワガコヒメヤモの形に倣って万葉集の歌が歪め説まれることがあるのは無視できない。

これらに比べると、用例の件数が少ないため、確かなことは分か

らないが、希求表現の或る場合についても同じようなことが指摘できるようである。万葉では、

あしひきの山波なくもが (四〇七六)

のように、その主格はハないしモをとるが、古今集では、

世の中にさらぬ別れのなくもがな (九〇二)

のようにノをとった例があるが、それが古今語として一般的な形であったか否か、分らない。

強いて言えば、右に挙げた感嘆文および反語・希求表現は、一般的な平叙文と袂を分ち、はさみ込みに近い遊離的な性格を帯びかけていたのでないか、と思われるが、そう言い切るにはもう少し用例が欲しい。

終わりに

富士谷成章の『あゆひ抄』や本居宣長の『詞玉緒』は、共にその古代語観察・研究の対象として古今集以下の八代集を主に取り上げた。その八代集として細かに見れば一枚岩ではあり得ないが、おおむね不規則なほみ出し部分が少なく、帰納し体系化するのに苦労がなかった。

ところが、その古今集の撰者たちが、それに先行する、そして自ら撰じた歌集の別名として「続」の字を冠した萬葉集およびその周

辺の上代の文献の言語は、八代集中心の体系から逸脱する所が少なくないため、宣長は「古風こふうの部」と称して張り出し項目を作った。

しかし、苗代水といえども下より上に流れる道理はなく、古今集以下の中古の歌語は、所詮上代語から直接または間接的に上代語の影響を受けている。一概には言えないが、平均すれば、案外に中古語の体系よりも上代語のそのの方が論理的に優れ、明快単純と言いつてもよいのではないか、と思うことが少なくない。

右に述べた所は、萬葉語さえも少しずつ風化しはじめてはいるが、古今集以下の八代集の中に見られる論理よりも、概して筋道通った体系が認められるのではなからうか、という日頃の感想を述べたまでである。

【注】

注1 ベシ（バイ）とマジ（マイ）とに、非四段活用形式の動詞が接する場合、必ずしもそれらの終止形から接続すると限らないことは広く知られている。特にそのことは上一段活用に偏って見られるようで、また、抄物など中世以降の口語資料に、見ベシ・着ベシ・似ベシ・居ベシなどが、見ルベシなどの標準的接続例と混じって見える（湯沢幸吉郎博士『室町時代言語の研究』）。

万葉・古今語の見ベシもそのしりと見るべきであらう。

注2 古今集のガニには、受ける活用形が「領巾も照るがに」「人も見るがに」など、四段や上一段などの終止・連体同形の場合もあって紛らわしいため、上代語の終止形を受けるガニと交錯したとも考えられる場合がある。拙著『萬葉集語法の研究』二

三七ページ参照。

注3 万葉集の「さ夜中と」の歌の第三句以下の原文は「鴈音所聞空月渡見」とあり、大多数の注釈書類が古今集と同じ形の「きこゆるそらに」と読んでおり、稿本も例外ではない。ただ桜楓社版だけが、「…そらゆ」と読むのは優れている。恐らく「鴈鳴乃所聞空從月立渡」（二二二四）に倣ったのであろうが、

助詞ユの読み添え例が少ない点に難がある。全集本で「聞こゆる空を」と改めたのは、これが、

沖つ浪恐き海に舟出せり」見ゆ（一〇〇三）

麻久良我欲海人漕ぎ来」見ゆ（三四四九）

などと同じく、いったん文末終止したあとに見ユを添えた上代語特有の「見ゆ」止め文であることに気付いたからである。もし、「…空に」と読めば、それは助動詞のような働きでしかない「見ゆ」にかかることになる。

注4 万葉集で、原文に「吾将恋八方」「吾恋目八方」などがあり、

現在アレコヒメヤモと読まれている句が十二あるうち、（二五

三〇（二七九七）（二八〇五）の三首はどの古写本・注釈書も「ワレコヒメヤモ」と読んでいるが、残りの九首は、何がしかの古写本、何らかの注釈書が「ワガコヒメヤモ」と読んでいる。古今集の読み方が絶対的なものとして尊重され、それが萬葉集の歌の訓にも影響を与えた一例である。同じように、

来る路は石踏山無鴨吾が待つ公が馬つまづくに（二四三）

の第二句を「イハフムヤマノ」と読む注釈書が今に跡を絶たない。これは業平の「さらぬ別れのなくもがな」などに引かれた訓と言うべく、万葉語として適当ではない。

【付記】

学部国語学演習を担当してかれ二十年以上にもなるが、その間一貫してテキストは古今集を用いた。最初は春の上・下、夏、秋の上・下、冬と四季の歌を順次に見たが、後に恋の部五巻を一巻ずつ下げながら読むことにした。その方が受講者たちにとっても親しみ易いらしく、反応も幾分大きかった。

古今集をテキストに選んだ理由は、これが古典文法の生れるルーツだ、と学生に説明したし、それに偽りはないが、本当は上代語を研究する自分のために、同じく歌集であり、年代的にも万葉集に最も近く、常に比較対照すべき文献はこの他にないと思つたか

らである。そして、もう一つの理由は、つねづね私淑する佐伯梅友先生からも「（漢字音なんか止めて）文法をおやきなさい」と言われたことがあり、先生の校注された日本古典文学大系本の『古今和歌集』をじっくり読もうと考えたからでもある。いわば学生諸君にお為ごかしを言つて、自分の便益で古今集を読んだのである。卒業生・学生に謝らねばならない。

それにしては、古今集についてかつて一度も論文を書いたことがない。関西大学を去るに当つて、罪滅ぼしの意味からも、恥を忍んで、この拙い一文を草した。（平成七年八月二十九日稿）

初校のゲラが届き、余白が八行分あることを認めたので、追加付記させていただきたい。四年前、片桐洋一氏が関西大学に來任された。以後、わたくしは廣瀬本萬葉集その他のことで多大の学恩を受けた。その一つに創英社版の『古今和歌集』の惠与を受けたこともある。遊紙に「御笑覧」とあつたが、笑つて拝見すべきご本ではない。何とかお返しせねば、と考えた挙句の「お笑いぐさ」にも、という意味も本当はあつた、ということをごの書き加え、片桐さんへの感謝の印とした。（十月二十六日追記）

ごく最近、大阪城南女子短期大学の木曾幸子氏に「蟹の歌」の「日の異に」の「日」を太陽と解する説があることを知つた。今はその批判を控えたい。

（十一月十八日再追記）